



子どものこころに寄り添う営み

村瀬嘉代子

慶應義塾大学出版会

目次

第一章

子どもの育ちを支える

さまざまな人に支えられる子どもの育ち

3

「呼び名」をめぐる

13

成長変容の密かな願い

17

見守る眼差し

21

徳之島の子どもたちに出会って

27

自分の図書館カードを持つ赤ちゃん

31

「本物」に出会う

37

食を通して伝えられるもの

41

第二章

子どものこころを支える

子どもの不安

49

こころの「しなやかさ」と「勁さ」

53

マニュアルやプログラムを活かす

63

クライアントと向き合う基本の関係

67

第三章

- 受け継がれるものと変容するもの 71
- 書くこと・話すこと 75
- 紆余曲折の育ちの道が実りへと至るために——養育過程の振り返りとよき展開を求める 79
- 子どもにとつての別れの悲しみを支える 83
- 人の真価とは——高齢者施設でのこと 95
- 想像力のちから——相互似顔絵法を創案して 103
- 自律、その人らしく生きる 107
- 施設で出会った子どもたち
- ここに届く言葉と行為 117
- かけがえのない小さな宇宙、あそびどころ 123
- 似て非なるもの 129
- 自然を感じ取る暮らし 133
- ゆつたりと機敏に——高橋田鶴子先生を偲んで 137
- 出立それぞれ 143
- ある日韓交流 147
- それぞれの春 151
- 時間感覚と将来の展望 155

第四章 「養育」から、すべての子どもの「育ち」を考える

もの、こと、人との関係性の中に立ち現れる感性 161

自分や世界を信じること、親を受けとめること 169

養育を担う人

施設と社会性 183 177

心理的支援の理論と技法について 187

第五章 講座…子どものこころの治癒と成長

講座1…生きる糧の基盤をつくる 193

講座2…子どもの心理的再生を支える 199

講座3…子どもの存在の根幹に纏わる事実を分かち合う

講座4…「生活」を基本におく専門的支援とは 215

207

おわりに 224

初出一覧 228

第一章 子どもの育ちを支える

さまざまな人に支えられる子どもの育ち

市井の人たちの支え

心理療法やカウンセリングの事例や経過は、主として、クライアントと支援者の二者関係を中心にして、その関係を通してクライアントの治癒成長が生じたという表現がなされることが多いように思われる。しかし実際には、クライアントを囲むさまざまな人やことがクライアントの治癒成長の契機として影響を及ぼす場合が少なくない。私は、こういう周りの人々やことがよい効果をもたらすようにするにはほどよいアレンジメントが大切だと考え、実践してきた。支援者はいわばコンダクターの役割をとることも状況に応じて必要なのだと言えよう。

子どもの視点からすると、忘れがたい本質的なことを学んだ、あるいは自分の存在の根幹を保証されたというような貴重な経験を、周辺とされる人との出会いによって得る場合が少なくないよう

に思われる。いろいろ異なる角度から例を挙げながら、考えてみよう。

文さんのこと

個人的経験で恐縮であるが、幼い日の忘れがたい学びの経験がある。それはちょうど五歳になったときであった。当時は人通りの多い街頭にしばしば浮浪者が居た。中には子連れで、石畳に座り頭を垂れて物乞いをしていた。そういう場を通ると私は自分の暮らしと比べて、文字通り胸が痛む想いがし、病弱の故も加わって次第に外出を喜ばなくなつた。

ある昼下がり、内玄関のベルが鳴つた。手伝いのつもりで出てみると、浮浪者が立っており、深々と頭を下げた。私は咄嗟に、地方に暮らす祖母から腕輪のように白銅貨を紐通ししたのをもらつていたのを思い出した。小走りに自分の部屋から持ち帰つて幾枚かの白銅貨を浮浪者に手渡した。浮浪者は深々と頭を下げてから足早に去つた。少しばかりいい気分になつていて、後ろからお手伝いさんの文さんの声。

「お子様なのに、ご自分のお金だからといってみだりに恵むということをするものではありません。あのお金はご自分の力で得られたものではありません。もとはお父様、お母様のものです。浮浪者の中には働ける人もいるのです。中途半端な優しさは人の働く気持ちを失わせます。それにまだお子様です。子どもは子どもの身のほどを知らなければなりません」

意味がすつとのみ込めた。雷に打たれたような衝撃と恥ずかしさでいっぱいになつた。

「今日はご存知なくてされたことですから、お父様、お母様には内緒にいたします。お話ししたことおわかりですね」

うなずくと、文さんは黙って抱きしめてくれた。

文さんは当時、二十一歳くらいであったろうか。実科女学校卒で、三歳年下の妹さんの幸さんと二人で家事見習いを兼ねて住み込んでいた。料理、裁縫、その他家事全般、てきぱきと何をしても上手で、母の言葉に耳を傾けているときや、夜、仕事を終えた後に本を読んでいるときの表情は引き締まっており、私と遊んでくれるときは活き活きとして表情豊かな人であった。

後に、心理療法の原則、心理支援の基本を書物や講義で学んだとき、それは幼い日に文さんから伝えられたことと表現は違うけれど、本質的には同じであることに気づいてはっとした。相手の自尊心、自律心や自立心を大切にす。適切な心理的距離を維持する。自分が引き受けられるか否かの責任性に基づく見立て、支援者の自己覚知……。これらはあのときの文さんが伝えようとしたことと通底している。文さんの言葉には本質が凝縮されていたのだ（文さんの言葉は母の考えの正確な反映でもあったのだが……）。人を支援する営みの基本となることを遠い昔に教えられていたことに気づいて、懐かしさと感謝、そして、この学びを今後の営みに生かしていこうという気持ちが生きてきたのであった。

文さんの言葉が幼児の私に伝わり、意味がわかったのは、幼なころに文さんは若いのに家を離

れて住み込みで働き、自分の力で生きており、その生き方が偉いと尊敬できたこと、しっかりといると同時に優しい文さんのことが好きだったこと、両親、とりわけ母の考えと文さんのそれが元は同じであることなどの条件が揃っていたからであろう。

母がお世話して幸せな結婚をされたのに、戦時下の空襲で亡くなったと聞かされたときは大泣きしたのを覚えている。学歴や職業にかかわらず、人は人として立派でありうるということを文さんは感得させてくれた人でもある（村瀬、二〇〇九）。

庭師のおじいさん

優れた子ども心理療法家バージニア・M・アクスラインは、自らの事例をもとに一人の孤独な自閉症の少年が彼女のセラピーによって癒されていく過程を一書（アクスライン、二〇〇八）に著したが、この中にだれにもつながりを持たず自室にこもる自閉症とされる少年に、庭師のお爺さんがさりげなく人としてのつながりの糸口を創るくだりがある。

庭師は一枚の木の葉を少年に手渡し、「この木の葉は風に吹かれてアメリカから大西洋を渡って欧州へ飛び、あちこちの国を風に乗って巡り、いろいろな風物にふれて、再び大西洋を渡ってアメリカへ帰ってきたのだよ……」と語りかける。少年はその木の葉を手にして、世界を思い描き、少しずつ人やこと、家族とのつながりを持ち始めるのである。もとよりアクスラインの心理療法家としての影響力が中心ではあったであろうが、この庭師のお爺さんのさりげない振る舞いと語りかけ

は、この少年が世界へと開かれていくうえで絶妙な影響をもたらしている。

K君のこと

小学四年生の自閉症のK君はようやく学習にも手がつき始め、彼にかかわる人々はその進歩を喜び、少々過ぎるくらいの励ましが始まった。やがて、K君の帰宅が遅くなり始め、母親は道草して何か問題行動をしているのではないかと来談された。

K君は依然学級で孤立し、帰宅しても、干渉好きなアパートの家主にいささか過剰に注意され、くつろげていないのではとふと考えた。私は母親に咎めるような口調で問い質すばかりではなく、下校するK君の後をそつと後から歩いてみたらと提案した。

下校路の途中に小さなクリニックがあり、その薬局の窓は道に面していて、薬剤師さんの横顔がガラス越しに見えるのであった。K君は帰途、そのクリニックの窓辺のところに立ち止まってじつと窓を凝視する。たまたまその薬剤師さんが窓外を見て、K君に気づきそつと微笑みかける。その笑顔を見ると、K君は家路へと歩き出すのであった。

母親はしみじみ述懐しながら、気づかれた。

「月見草のような感じの優しいほつとする笑顔を浮かべる若い女性の薬剤師さんでした。思えばKはほつとできる優しさを求めていたのだと思います。

小さいときから通ってきた通所療育機関は立派な療育訓練をしてくださるところだけれど、Kに

とつてはほっとする気分ではなく、夢中で緊張の時間だったのかもしれない。私も少しでも変容成長させようという意識で頑張り一辺倒でした。あの薬剤師さんのような表情をして、そっとにつきり微笑みかけるなんてこと忘れていたような……。

後ろから歩いて、帰宅が遅れるわけを知って、Kへの接し方にゆとりを持つとうと気づきました」母親の述懐を聴きながら、その気づきの確さに感じ入った。やがてK君の帰宅は遅れることがなくなり、以前より家族とのやり取りが増えて穏やかさが増したのであった。

C子のこと

ある養護施設でのこと。一人の女子高校生C子がボランティアで園生を自宅に招じ入れて料理を教える品のよい婦人のもとへ通うようになった。C子は職員には何かと反発的批判的な言動が多く、それでいて外出恐怖心が強くて、さまざまな状況で付き添いが必要としていた。彼女は自分の矛盾に自分でも気づき、自尊心が脅かされ苦しくなり、それがまた攻撃的言辞になるという悪循環に陥っていた。

その料理を教える婦人は、彼女の外での振る舞いには顧慮せずに、その家の大事な知人として迎え入れ、C子の表現によれば庶民的な食材から上品でおいしい料理の作り方を教えたのである。

C子曰く。「料理は作る人の人柄を表すような気がする。先生と作ったお料理と一緒に食べるときは話題が広がっていろいろなことが学べる。そして先生は言葉がきれい。私もきれいな正しい言葉

を使いたい……」

彼女は私に言葉を選びながら丁寧に、自分が持っている問題点や課題について伏し目がちに話した。猛狂ったように叫んでいるときは別人のように……。

〈今、お話ししてくれている貴女は紛れもなくC子さんよ。今の折り目正しい素直なお話をしているCさんが次第に大きくなって、別のCさんは小さくなって後ろに目立たなくなっていくように思う……〉

「そうになりたい！」

専門家としての立場では、全体的に的確に子どもを理解することが求められる。だが、時として自分のまさに今そのものを、よくなりたいたいと思ひ、よいところが表に出ているその自分に焦点を合わせてくれる人に出会うことも、子どもの成長や回復の道筋には意味があるように思われる。専門家としての視点による全体を的確に捉えたアセスメントをもとにしつつも、このような子どもの望みやあこがれを汲み上げる眼差しがあることは、子どもにゆとりをもたらし、希望を支えるよすがになるようにも考えられる。

人が支える関係づくり——「教会のお母様」

次いで、個人と個人とのふれ合いによる育ちの支えから、視点をシステムへ転じて考えてみよう。スイスに暮らす友人を、間隔をおいて幾度か訪ねるうちに、その間の展開に感じ入り、考えさせ

られた例がある。

あるプロテスタント教会の教会員の中では、「教会のお母様」と呼ばれる役割を心ある人が任意的に申し出て、子どもの育ちを支えるのである。

教会員の中の子どもで、いわゆる発達障害を抱えていて、学業に難儀し、友人関係も円滑には運びにくい子、あるいはその子自身の資質には格段の問題がないものの、家庭的に何らかのもろもろの要因があつて、孤独をかこつ子どもなど、つまり生き難さをもつ子どもに対して、この制度は実の親や家族や親族縁者、さらには医療機関や療育機関の専門的支援を補い支えるものとして機能している。

ボランティアで有志の婦人が「教会のお母様」となり、受け持つ子どもが十八歳くらいに成長するまで、精神的に支える役割をとるのである。お誕生日、クリスマス、学期の終わりに成績表をもらうとき、進学、就職するときなど、節目のときに、その子どもの状態に合わせて励ましや慰めのカードに添えて気持ちを込めたプレゼントをする、時には会って話したりなどもするのである。よき理解者、支え手であろうとするのだ。ただし、程よい距離感を保つようにして、子どもの自立（自律）心を大切にしている。実際、はじめに会ったとき、かなり人間関係や学習に難しさを抱えていた子どもがこういう支えによってかなり落ち着き、まあ、こんなにこの人らしい生きる場と方向を見つけた、と感嘆した例を幾つも見た。

高齢者とのかわり

我が国の少年事件の処遇に試験観察制度がある。これは審判での処分決定を一時先に延ばし、一定期間を試験観察期間として少年に遵守すべきことを申し渡し、この期間中に性格行動傾向が改善するように指導観察を所定の期間行い、所定期間終了時に、最終決定を少年審判で言い渡すものである。

試験観察の行われ方は個々の少年の特性に応じてさまざまであるが、その中に高齢者ホームに補導委託される少年がいる。高齢者ホームで、少年はヘルパーさんの指導を受けながらいろいろ働くのであるが、高齢者から労われたり、感謝されたり、励まされる経験は、概して自尊感情が損なわれている少年たちにとり、自分を捉え直し、自信を取り戻して立ち直るためのよい刺激になるのである。

昨今、福祉法人施設内で、保育園の子どもたちが同じ敷地内の高齢者ホームを訪れて、入居者の高齢者の人々に歌や踊り、絵や工作物を披露して、交流し、双方が体験の幅と彩を増す試みを実行している。幼い時から、生きるということ、育つこと、人は成長し変容すること、やがて成人した人は次の世代を育て、かつ前の世代の人をお世話し、そして静かに高齢期へと移っていく、という人の存在、人生について考える自らの生を引き受ける姿勢の原型が、良い意味で育まれるのではなかろうか。

*

子どもの育ちに意味をもつ人、場は小さいもの大きいもの、ほっとした寛ぎや楽しみ、新たな好奇心を呼び起こす広い世界へのいざないの契機、生きていくうえでの人としての基本、本質的事項への気づき、これら、次元を異にする大小さまざまな影響を、いわゆる専門家と呼ばれるのではない人との出会いやかかわり合いの中で子どもは受け取っているのだ。

子どもの育ちが豊かなものになるには、こうした専門家以外の人々から意味ある刺激や影響を受けることが望ましい。市井の人々が自然に子どもにかかわることを、それぞれの立場で無理なくし、かし真摯に、そしてどこか肩に力を入れすぎないゆとりある姿勢でやってみよう、それは子どものためばかりでなく、自分の生をも豊かで意味あるものにしてくれるものだ、という認識を高めるような活動が専門家の仕事の一つに要るのではあるまいか。

〈文献〉

- ・村瀬嘉代子『新訂増補 子どもと大人の心の架け橋——心理療法の原則と過程』金剛出版、二〇〇九年
- ・バージニア・M・アクスライン（岡本浜江訳）『開かれた小さな扉——ある自閉児をめぐる愛の記録（新装版）』日本エディターズスクール出版部、二〇〇八年